

平成21年8月1日
(2009)
第99号
毎月発行
編集
公民館だより編集室
発行
西東京市公民館

西東京市 公民館だより

田無公民館 南町5-6-11 TEL 461-1170
芝久保公民館 芝久保町5-4-48 TEL 461-9825
谷戸公民館 谷戸町1-17-2 TEL 421-3855
柳沢公民館 柳沢1-15-1 TEL 464-8211
ひばりが丘公民館 ひばりが丘2-3-4 TEL 424-3011
保谷駅前公民館 東町3-14-30 TEL 421-1125

戦時中の婦人会・青年団 史料から読む……

第2次世界大戦中、国内においても市民が戦争協力のために組織・動員されました。国防婦人会、青年団などです。

当時の田無・保谷においても婦人、青年組織が銃後を守っていました。史料からその活動の一端を見てみましょう。

婦人の組織

昭和7年、大日本国防婦人会が結成されました。保谷の記録でも「昭和7年ごろ、国防婦人会ができたと思う。その前に愛国婦人会も出来ていて、出征兵士の見送りなどをしていた。」と



写真提供 西東京市図書館

「これには、役場が音頭をとって荒屋敷（現在の下保谷）付近の何人かの婦人をピックアップしたよつである。…婦人会の主な活動は、出征兵士の見送り、兵士の出征する家への手伝い（おにぎり作りなど）、千人針遺骨の出迎え（下保谷から柳沢まで行った）、家庭防火隊としての防空演習などだった。」(1)

青年の組織

また、田無町国防婦人会長名では、昭和12年7月に次のような文書が出されています。「…此の時に当りまして吾が田無町国防婦人会は協力一致して兼ねての用意を十二分に發揮致しまして銃後の憂へなからしめる様に努力し度いと思ひます。何卒会員の皆様層一層の御力添へと御奮闘を御願ひ致します。」(2)

田無では家庭衛生婦人会の結成も記録されています。「婦人は家庭に帰れば健全なる子供を育成、しかして銃後の防疫の完璧を期せよ」と田無署では管内十五歳以上の女子約二万名を

同部の創立を見ました。」(5) この時代、国民に対し教育やメディアを通して徹底した思想の統制を図り、戦争を遂行するための体制を強化してきました。純粹で誠実な青年たちは、戦時体制を支えました。

平和で民主的な社会教育へ

日本の戦時体制を結果的に支えたさまざまな要因の中に、地域末端にまで戦争協力のための組織化がありました。社会教育研究者の相庭和彦氏は指摘します。「敗戦まで日本の社会教育は、青年団や婦人会、少年団などの団体を国家が統制してなされてきた。つまり団体が社会教育の中心の支柱であった。」と。そしてこのくだりの直前ではこう述べています。「実はこの（編集室注：戦後、民主的な国民形成に寄与していくこととなる）公民館こそ、戦前社会教育と戦後社会教育の相違を端的に示すものであった。」(6)

引用文献

- (1) 「戦争、その時保谷では」住吉公民館 平和について考える講座の記録
- (2)(3)(5) 田無市史 第2巻
- (4) 保谷市史 史料編第4巻
- (6) 『現代生涯学習と社会教育』史一戦後教育を読み解く視座

サークル訪問

若竹会

音が出る喜び



代表の三澤さんは「尺八は穴が少なく、5個 簡単だろう」と始めたのですが、目論見が違っていました(笑)。その難しい尺八を続けていきなかつたので、講座終了後、みんなでサークルを作ることができてよかったです。そして、違う人生のかわりが生まれるし、まともな音が出るようになれば、外に向

わが国古来の伝統楽器として、また、民謡や演歌の伴奏でもおなじみの尺八。その尺八を楽しむサークル「若竹会」は保谷駅前公民館で活動しています。会の発足は、公民館主催の講座「尺八を楽しむ」がきっかけで、受講者8人で今年3月に立ち上げました。尺八の世界に都山流・琴古流といった流派がありますが、とくに流派にこだわらないスタイルでさまざまな曲を練習していきます。譜面も、尺八譜を使う人、五線譜を使う人とさまざまです。集まった面々は尺八の経験の長い人、まったく経験の無い人とい



かかって演奏活動ができればいいですよ」と。「アメイジング・グレイス」を練習しているのは、女性二人の内田さんと南雲さん。この曲には、練習に8時間費やしたそうです。入会した理由については、南雲さんは「民謡を習っている母と一緒に舞台上に立てたいな」と思っています。「ご家族との夢を語ってくれました。30年近く、尺八に親しんできた鈴木さんは、「まだ日の浅いサークルですので、室内では個々に好き勝手に吹いて音だしに全力を注いでもらっています。全員が一通り安定した音が出るようになつたら、合奏を是非したいですね」と抱負を。講座からの熱烈的な尺八への思いを最年長者の小西さんは「尺八の音色は、ほかの楽器には出ない音だと思えますね。東洋の音である五音階が日本人の郷愁を呼び起こすのではないでしようか」と。練習に練習を重ねて音色を楽しんでいる小西さんの笑顔は最高に輝いていました。